

ピーター・グライムズ

10/2 (火) ~ 10/14 (日)

会員販売期間
6/2 (土) ~ 6/13 (水)

一般発売日
6/17 (日)

■私自身は、「ピーター・グライムズ」はベルクの「ヴォツェック」や「ルル」と並ぶ、二〇世紀オペラの最高傑作のひとつだと思っています。音楽は基本的に抒情的で美しく、物語に引き込まれずにはいられないでしょう。自然の脅威と隣り合わせに生きる漁村の物語という点では、おそらく日

——このオペラを初めて観る方にメッセージをお願いします

■特に好きなのは自分が歌っていない場面ばかりですね(笑)。もっとも好きな場面は、第二幕第一場の最後に女性たちが歌う四重唱。町の男衆が一丸となってグライムズの探索に行ったあと、残されたエレン、酒場の女将アンティとその二人の姪たちがしつとりと歌う四重唱は、歌詞も音楽もすべてすばらしく、心打たれる場面です。それから、第三幕の前に演奏されるオーケストラによる間奏曲「月光」も名曲だと思います。

ペラでこのプロダクションに出いたときに観ており、とても印象深かったので、今回出演できることをたいへん楽しみにしています。

——オペラの中で特に好きな場面はありますか？



2009年イングリッシュ・ナショナル・オペラ「ピーター・グライムズ」より © Clive Barda

メトロポリタン歌劇場、バリ・オペラ座など 今・来シーズンはジークムント役でも大活躍

——スケルトンさんはオーストラリアのご出身ですが、これまでオペラ歌手としてどのようにキャリアを積まれてきましたか？

■一九九三年にシドニーのオペラ・コンクールに優勝し、その賞としてアメリカのシンシナティ音楽院に留学しました。大学院卒業後、すぐにサンフランシスコ・オペラのヤング・アーティスト・プログラムに入り、そのあとドイツのカルスルーエの歌劇場に所属しました。その時の音楽総監督が大野和士さんで、彼の指揮で私は初めてローエングリンを歌ったんです。その後、フランクフルトの歌劇場に移り、五年ほどアンサンブル・メンバーとしていろいろな役を歌いました。そのうち客演の仕事が増えたのでフリーになり、現在はアメリカを拠点に置いて活動しています。

——ご自分の声のタイプがヘルデンテノールであるということについては迷いはなかったのですか？

■それはなかったですね。師事した先生方のアドバイスも一致していました。

——尊敬する歌手は？

■ベン・ヘップナー、ジェームズ・キング、マックス・ローレンツ、セッド・スヴァンホルム、そして少し違いますがヴィントガッセンです。そのなかでもジェームズ・キングは私がもっとも手本にしていた歌手で、彼の声は男性的でブロンズがかった輝きがあり、しかもつねに美しさを失わないという点で、私にとってヘルデンテノール中のヘルデン

スチュアート・スケルトン



二〇二二／二〇二三シーズンのオープニングの新作、ブリテン「ピーター・グライムズ」。注目のタイトルロールを歌うのは、スチュアート・スケルトンだ。オーストラリア出身のヘルデンテノール、スケルトンは、いま世界で一番のグライムズ歌いと言っても過言ではなく、夏にはロンドンの音楽祭プロムスでも歌う予定。現在はイングリッシュ・ナショナル・オペラ「さまよえるオランダ人」エリック役に出演し、オランダ人、ゼンタよりも存在感を放つほどの好演で話題をさらっている。そんなスケルトンに、「ピーター・グライムズ」の魅力について話をうかがった。

インタビュー◎後藤菜穂子(音楽ライター)

Stuart Skelton

オーストラリア・ニューサウスウェールズ州生まれ。次世代を担うヘルデンテノールの代表格としてメトロポリタン歌劇場、ウィーン国立歌劇場、バイエルン州立歌劇場、ベルリン国立歌劇場、ハンブルク州立歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、パリ・オペラ座、イングリッシュ・ナショナル・オペラ、チューリッヒ歌劇場など世界各地の一流歌劇場で活躍。レパートリーは幅広いが、「ピーター・グライムズ」タイトルロールは特に定評があり、2004年にフランクフルト・オペラでのロールデビュー以来、世界各地で出演。新国立劇場初登場。

このオペラでは海や嵐、星空などの大自然が重要な役割を果たしますが、グライムズという人物もそうした自然の現象として捉えられるのではないかと私は考えています。グライムズの音楽の中にどこかそうした原始的なものを感じるのです。いつてみればグライムズは活火山のようなものではないでしょうか。町の人々と衝突するたびに少しずつ噴煙を上げ、そして最後は爆発し、自分のすべてを吐き出して活動を閉じるのです。

——グライムズの役は、もともとブリテンがリリック・テノールのピーター・ピアーズを念頭に置いて作曲したのですが、その後六〇年代にジョン・ヴィカーズが歌って以来、ヘルデンテノールでも歌う人が増えてきました。ブリテン自身はヴィカーズの解釈は気に入らなかったと言われていますが、ヘルデンテノールがこの役を歌うことについてどのようにお考えですか？

■ピアーズはブリテンのバートナーでもあったので、彼とはまったく声のタイプの違うヴィッカーズの解釈をブリテンが気に入らなかったとしても不思議はないと思います。むしろグライムズの

ユニークな点は、声のタイプが異なる歌手でもこのパートを歌いこなせる歌手ならばだれでも歌える役だということではないでしょうか。

歴代のグライムズの歌い手としては、ピアーズをはじめ、アントニー・ロルフ・ジョンソン、フイリップ・ラングリッジ、ジョン・ヴィカーズ、ベン・ヘップナー、ステファン・グールド、クリストファー・ヴェントリスらが挙げられますが、それぞれタイプの異なるテノールであるにもかかわらず、どの解釈も有効であり、オペラの本質は不変であるという点で驚くべき作品だと思います。しかもブリテンにとって事実上、初の大規模なオペラだったわけですから。

——私自身の声はどちらかというとヴィッカーズに近いタイプですが、自分の声の長所を生かして歌うしかないのです、自分なりのグライムズを精一杯歌いたいと思います。

——今回新国立劇場で上演されるウィリー・デツカーのプロダクションは初めてですか？

■歌うのは初めてですが、昨夏、尊敬するテノールのベン・ヘップナーがロンドンのロイヤル・オ

ペラです。

——スケルトンさんのオペラのレパートリーについてお聞かせください

■ワグネルのオペラでは「さまよえるオランダ人」のエリック、ローエングリン、「ワルキューレ」のジークムント、バルジファルです。その他、ヤナーチェクの「カーチャ・カバノヴァー」のボリス、「イエヌーファ」のラツァ、「フィデリオ」のプロレスタン、R・シュトラウスの「ナクソス島のアリアドネ」のパッカス、「影のない女」の皇帝役などを多く歌っています。最近では特にジークムントが多く、四月から五月にかけてはメトロポリタン歌劇場の「指環」ツィクルスで歌いましたし、来シーズンもこのグライムズのはかは、バリ・オペラ座の「指環」ツィクルスなど、ほとんどがジークムント役です。

——今後歌ってみたい役はありますか？

■今後いけばん歌いたいのはトリスタンで、二〇一六／一七年のシーズンあたりに計画があります。その他にはオテロと、コルンゴルトの「死の街」のパウル役をぜひ歌ってみたいです。今年の末には「スペードの女王」のゲルマン役をアシュケナージ指揮のコンサート形式で初めて歌います。あと、サムソンや「道化師」のカニオの役は一度しか歌ったことありませんが、もっと歌いたい役です。

——今まで日本にいらしたことはありますか？

■日本を訪れたのは一度だけで、二〇一二年十二月に大野和士さん指揮のNHK交響楽団とベートーヴェンの「第九」を歌いました。昨年の大震災にはたいへん心を痛めており、今回日本に行つて、皆さんにエキサイティングな舞台を体験していただけるようベストを尽くします。

——興味深いお話をありがとうございました。